

パストゥレルにおける人間性と動物性

高 名 康 文

パストゥレル (pastourelle) は、詩の話者である「私」と羊飼いの少女の出会いを描く叙情詩で、12世紀から15世紀にかけて、南仏、北仏の詩人によって歌われた。多くの作品において、冒頭、気候のよい季節に馬に乗って田園を行く、詩における「私」——騎士という設定になっている——が、美しい羊飼いの娘と出会い、美しさに魅せられて声をかけるという場面が描かれる。娘は、騎士に声をかけられたことにためらい、自分にはすでに恋人があることや、男の人と話していたら母親に叱られてしまう、と言って話を打ち切ろうとするが、詩における「私」は、娘の魅力を語ったり、あるいは、贈り物をするとか、幸せにしてあげるからと言いつづれたりすることで、誘惑し続ける。娘が智恵を働かせて、騎士の誘惑を斥けることもあるが、騎士を受け入れるということもある。筆者は全ての作品に目を通したわけではないが、娘が騎士を斥ける割合と、騎士が娘をわがものとする割合は、半分半分であるようだ⁽¹⁾。

作品の冒頭に舞台設定として、春ののどかな情景が描かれるが、小鳥の歌や、緑に生える草や、美しく咲く花々といったもので、場所が田園であることを別にすれば、果樹園を舞台とする宮廷風の叙情詩と変わらない。また、詩における「私」は、そこを物思いに沈んでみながら進んでいくのだ、ということになっていることがあるが、それは、自分が宮廷で恋人に裏切られたからということになっている。多くの場合、詩の話者の「私」は続けて自分の苦しみを羊飼いの娘に打ち明け、しかし、あなたのような素敵な人に会えたので、私の不幸は報われたと言って、娘に求愛をする。このように都合のよい、詩の話者の願いを受け入れるか否かは、それぞれの作品に描かれる娘の智恵次第である。

すなわち、パストゥレルとは、詩人が貴婦人に寄せる「至純の恋」を描く、宮廷風叙情詩の「私」が、それと地続きの別の世界に迷い込んだ際の体験を

描いた作品ということになる。恋のことといえば、宮廷での作法しか知らない詩人は、羊飼いの娘に対しても、あたかも貴婦人に対してそうするように、彼女への忠誠と奉仕を誓うが、騎士は娘にすぎなくあしらわれたり、あるいは愛を獲得しても、その誓いをしばしば反故にしたりする。そのような作品のあり方には、宮廷的な価値観に対して、それは絵空ごとであるというような批判が伴うことが予想される。もしそうなら、宮廷風叙情詩に借りた表現は、そのパロディーということになるが、はたしてどうなのだろうか？⁽²⁾

12世紀末から13世紀初頭に南仏で活躍したガヴァウダンの「連れもなく、うち捨てられて」(Dezamparaz, ses companho)という詩句に始まる作品における「私」は、娘に対して、次のように話している。

“[...]

En qual que·us vulhaz vos o prenc,
que ieu vos plevise e·us afi
que vostres suy endomenjatz ;
e fais de mi so que·us vulhaz,
neys lo cor traire ab un brenc.”

(Gavaudan, « Dezamparaz, ses companho », Paden 26, vv. 42-46)⁽³⁾

あなたが何を望もうが私はそれを受け入れます。

あなたの臣下となることを

誓って、確かに言いますから。

あなたが望むことならなんでもしてください。

心臓を熊手で搔き出してくれても構いません。

詩の話者は、娘の臣下になり、絶対服従することをもちかけている。詩人は、宮廷で貴婦人に裏切られたと言いながら、娘に求愛をする。娘は、ソロモンの故事を持ち出して諫めるが、詩人が、愛は善良な恋人に、よいことしかもたらさない、と述べると、娘は、

si m'es amicx, amiga·us so
 quar tan n'etz lecx et enveyos.
 Yeu gieti foras et espenc
 de mon cor brau erguelh. [...]
 (ibid., vv. 66-69)

あなたが私の恋人というなら、私もあなたの恋人になります。
 あなたが、これほどに思い焦がれ、愛に飢えているのですから。
 私は、心から粗野な傲慢を
 捨て去ることにしましょう。

と言って受け入れる。羊飼いの娘は、貴婦人と同等の知性や矜恃を持っている上に善良であり、詩における「私」は、宮廷の外の世界で、宮廷で得られる恋の代価物を得たことを悦ぶ。

話者の心臓を掻き出す道具として「熊手」がでてくるのは、娘が羊飼いだからだが、以上に紹介した詩の展開から言って、これがアイロニーであるようには思えない。

とはいえ、この作品のように羊飼いの娘が宮廷の貴婦人と同様に描かれるというのは、このジャンルの作品の、南仏と北仏におけるその後の展開を考

慮すると、かなり特殊なものと言える⁽⁴⁾。騎士を追い返すという設定の場合、娘は賢く描かれているということになるが、たとえば、パストゥレルの中ではごく初期に成立したマルカブリュの「ある日、垣根のそばで」(L'autrier jost'una sebissa) という作品に登場する娘は、求愛をする騎士に対して、「宮廷の男は宮廷の女を求め、農夫は農民の娘を求めるのが、それぞれの分というものだ」ということを言う。

“Don, oc ; mas segon drechura
serca folhs la folhatura,
cortes cotez'avantura,
e'l vilas ab la vilhayna.
En mans locx fa'n sofraitura,
que non esguardon mezura,
so ditz la gens ansianya.”

(Marcabri, « L'autrier jost'una sebissa », Paden 8, vv. 78-84)

「殿よ、そうですね。しかし、道理によれば、
狂った人は狂ったことを求め、
宮廷人は、宮廷での情事を求め、
農夫は、農民の女との情事を求めるということになります。
人々は多くの場所で、これに反したことをして、
節度を守っていないと
古の人々は言っています。」

語られていることが諺風になっているので、引用の最後の行に出てくる「古の人々」は、さきの作品にでてきたソロモンのような賢者ではなく、日々の暮らしの中から知恵の言葉を得る庶民のことを指しているように思われる。娘は、貴族の愛の規則に従うのではなく、庶民の智恵によって詩における「私」を追い返しているということになる。

この作品では、娘の知恵が功を奏して、騎士は求愛を諦めるが、そうはならない例もある。北仏のアラスで、『聖ニコラ劇』を書いた詩人のジャン・ボデルの作品とされるパストゥレルが2つ残っているが、そのうちの一つに、「先日、馬で行くと」(Jean Bodel, « L'autrier quant chevauchie », Paden 21)で始まる作品がある。この作品における「私」は、番をしていた羊を狼に攫われた娘に対して、もしも恋人のロバンを捨てて自分の恋人になってくれるなら、羊を取り返してやろう、と申し出て、娘はそれを受け入れるのだが、「私」は約束を果たしたのに、娘は、大声でロバンに助けを求める。娘の不実を知った「私」の方も「私」で、娘に襲いかかり、欲望を満たす。ことが済んだ後に、やってきたロバンが、何が起こったか悟って悔しがる様子で作品は締めくくられる。この作品の場合、娘の智恵は、「私」の実力行使によって打ち破られ、ロバンの怒りは滑稽に扱われているということになる。

このように、作品が、馬に乗ってやってくる騎士の「私」と羊飼いの娘の智恵比べのようになってくると、宮廷風の叙情詩を思わせる作品の書き出しや、そのような作品における口説き文句しか知らない騎士の言葉と、現実の状況の間に齟齬が生じることになる。それは、遊戯、パロディ的な現象ということになるだろう。ジョスランという詩人が書いた「ひばりの鳴き声が聞こえてくると」で始まる詩では、ひばりの声が聞こえ、堇の花の香りがするという書き出しの後、美しい羊飼いの娘に出会った詩における「私」は、

Dous cuers, amors me semont

k'en vos servir tout me mete,

(Jocelin, « Quant j'o chanteir l'aluete », Paden 31, vv. 15-16)

優しい心よ、愛が私に命令しているのだ。

あなたに仕えることに私のすべてを捧げろと。

と、娘への奉仕を誓い、また、娘に自分の恋人のシモンが来たら、「棒を打たれて殺されてしまうか、犬をけしかけられて、八つ裂きにされてしまいますよ」(ibid., vv. 29-30) と脅されると、

“Belle, trop cowairs seroie,

foi ke doi Deu et ces nons,

se j'ai proier vos laissoie

por vilain ne por gaignons.

Se de vos un bial respons

de vostre boen cuer avoie,

certes plux hardis seroie

ke n'est leupairs ne lieons,

et plus de dix vaincroie

de teils vilenés garsons.”

(ibid., vv. 31-40)

「美しい人よ、神と、その名にかけて誓って、

もし、田舎者や犬のせいで
 あなたへの求愛をやめることがあれば
 私はあまりに臆病ということになるでしょう。
 もし、あなたが、よい心映えで、
 もっとよい返事を下さったら
 私は、豹やライオンよりも
 もっと勇敢になって、
 田舎じみた若者なんて
 10人以上でも打ち倒してしまうことでしょう」

と、大変に勇ましいことを述べる。しかしながら、かんかんに怒った羊飼いがやってきて、弓を向けられると、

et je montai si m'en tor.
 Maix tant vos puis je bien dire
 k'ains maix n'o si grant paour.
 (ibid., vv. 68-70)

私は馬に乗って立ち去った。
 これだけはあなたたちに言えることだが、
 後にも先にも、あんなに怖かったことはない。

と、這う這うの体で逃げ出してしまふ。大言壮語と、その後の行動の描写から、詩における「私」は自らを戯画化した語りをしていると言える。

パストゥレルには触れたことがないが、アダン・ド・ラ・アールの劇『ロバンとマリオン』を知っているという方は、パストゥレルに、庶民的な智慧に長けた娘が、欲望から彼女をものにしようとする騎士を追い返して、恋人のロバンに対する貞節を守るというような作品を期待していたかもしれない。しかしながら、これまでに述べたように、半分の作品では騎士である「私」が、娘を口説いて、あるいは強引に、欲望を満たしている。また、娘の方も、必ずしも恋人に対して貞潔を守ろうとするわけではなく、物をあげるという誘惑にたやすく乗ってしまうことがあるし、さらにそうした場合、事実を知って悔しがる恋人に対してからかいの台詞を述べるなどという作品もある。そのような作品において、娘は、人格的な奥行きをもたない、「私」の欲望を反映する鏡として描かれている、ということになる⁽⁵⁾。

そのような作品の典型的な例として、13世紀の北仏で書かれた「花が野原に生えるのを見る時」(« Quant voi nee », Paden 109)で始まるパストゥレルがある。この作品で騎士である「私」に声をかけられた娘は冒頭、用心をして村の若者たちに助けにくるようにと叫ぶが、「私」は、彼女を「励ました」(« si je l'ai reconfortee », v. 25)とある。「励ます」とは、彼女のことを愛する者は、あなたの慈悲にあずからなければ、すぐに死んでしまうと褒めそやすことだが、それは、すなわち「誑かす」ということである。

Lors l'ai tant flatee,

guilee, [...]

(« Quant voi nee », Paden 109, vv. 34-35)

褒めそやし、

また誑かす〔後略〕

そう言われて心を動かされた娘を、草むらで抱きしめると、詩の話者の「私」は娘の果実を摘む。ことが終わった後の「私」の行動は次の通りである。

Recenglee
 si ma sele doree ;
 pou senee
 s'en est en piez levee
 si a pris mon palefroi
 par la rene noee,
 puis a dit, “Estés, estés !
 Avez me vos guilee ?”
 “Nenil, bele, par ma foi ;
 ainz monterez devant moi
 si en vendrez avecques moi
 en la moie contree.”
 “Non ferai, par saint Liefroi,
 ainz m’auroiz espousee !”
 Et quant j’oi sa pensee escoutee,
 lors montai sur mon palefroi,
 a Dieu l’ai commandee.
 (ibid. vv. 61-77)

私が再び
金色の鞍にまたがると
愚かな娘は
立ち上がって
私の儀乗馬の
手綱を手にとった。
そして言った。「待って、待って、
あなた、私を騙したの？」
「いいえ、美しい人よ。誓って騙していません。
私の前に乗馬して、
私の国まで
一緒に来なさい。」
「聖ルフロワに誓って、そうはしません。
私と結婚してくれるのであれば。」
私は彼女の考えを聞くと、
儀乗馬に乗って
彼女にご機嫌ようと言った。

騎士である「私」は、羊飼いの女と結婚しようとする筈もなく、彼女の考えを聞くなり、別れを告げて馬に乗って立ち去っていく。この作品のように露骨であることは少ないが、パストゥレルにおいて、騎士は、娘に求愛を断られるにせよ、その果実を摘むにせよ、その続きが描かれることはない。娘とのその後があるというようなことは、想定さえされていない⁽⁶⁾。

はたして、このような騎士の不作法と、彼が心得ているはずの宮廷風の作

法は、矛盾するのだろうか？ まったく矛盾しない。宮廷人である「私」と羊飼いの娘のあり方は、アンドレアス・カペルラーヌスの宮廷における愛の指南書、『愛について』の第1章第9節で示されていることそのものである。

[...] *Dicimus enim vix contingere posse quod agricolae in amoris inveniantur curia militare, sed naturaliter sicut equus et mulus ad Veneris opera promoventur, quemadmodum impetus eis naturae demonstrat.*

〔前略〕というのも、農民がウェヌスの宮廷で戦うということは滅多に起こらないからである。しかし、彼らも当然のことながら、馬やラバと同様に、自然の衝動が示す通りに、ウェヌスの行いをするように促される。

Sufficit ergo agricultori labor assiduus et vomeris ligonisque continua sine intermissione solatia.

農夫には、不断の労働と、休むことない、鋤と鍬がもたらす喜びで十分である。

Sed etsi quandoque licet raro contingat eos ultra sui naturam amoris aculeo concitari, ipsos tamen in amoris doctrina non expedit erudire ne, dum actibus sibi naturaliter alienis intendunt, humana praedia, illorum solita fructificare labore, cultoris defectu nobis facta infructifera sentiamus.

しかし、稀なことではあれど、時に彼らが自分たちの本性を超えて、愛の刺激に駆り立てられることがあったとして、彼ら自身に愛の教えを教育することは益とはならない。彼らが自分たちの本性にとって異質な行いに専念しているうちに、いつも彼らの労働によって実を結ぶ人間の農場が、耕し手がいなくなることで、不毛になってしまわないように。

Si vero et illarum te feminarum amor forte attraxerit, eas pluribus laudibus efferre memento, et, si locum inveneris opportunum, non differas assumere quod petebas et violento potiri amplexu.

しかし、もし、農民の女への愛が、お前を強く引き付けたとしたら、その女をたくさん賞賛して連れ出すことを考えなさい。そして、もしも、好都合な場所を見つけたら、求めるものを我が物として、乱暴な抱擁で手に入れることをためらわないように。

Vix enim ipsarum in tantum exterius poteris mitigare rigorem, quod quietos fateantur se tibi concessuras amplexus vel optata patiantur te habere solatia, nisi modicae saltem coactionis medela praecedat ipsarum opportuna pudoris.

(Andreas Capellanus, *De amore*, Liber I, Capitulum XI)⁽⁷⁾

というのも、彼女たちの外面にあるこわばりを和らげて、お前の穏やかな抱擁に身を委ねるようにしたり、お前に、お前が願う喜びを持つことを許すようにしたりするのは、難しいことだからだ。彼女たちの羞恥心を、ともかくにも節度をもった強制によって、適切に治療することが先

に来るものでなければ。

農民は、愛においては、動物と同様に、本能に従っているだけだから、思いを遂げるためには、適度な強制をしてもよいということである。「花が野原に生えるのを見る時」における「私」の羊飼いの娘への振る舞いは、まさにこの教えに記されている通り、ということになる。ということは、宮廷風叙情詩のパロディーとも映るこの作品は、宮廷における価値体系そのものに基づいて成立している、ということである。

それでようやく、本論の題名にある人間性と動物性だが、アンドレは、農夫を動物と同様の存在としている。パストゥレルでも、このような、宮廷人の農民、牧人観を仄めかすような箇所がみられる作品がある。13世紀に書かれたとされる「今朝、夜明けに」(Hui main par un ajornant)から始まるパストゥレルでは、賢い羊飼いの娘は、次のように言って、騎士の誘いを断る。

“Chevalier, se Dex vos voie,
puis que prendre voulez proie
en plus haut lieu la pernez que ne seroie ;
petit gaaigneriez et g'i perdroie.”
(« Hui main par un ajornant », Paden 110, vv. 29-32)

「騎士よ、あなたに神の加護がありますように、
獲物を捕まえたいのなら、
私よりももっと高いところで捕まえてください。
〔私を捕まえても〕あなたが得るものは少ないし、私には失うものがあり

ますから。」

娘は、騎士が自分のことを狩りの獲物（proie）としか見ていないことを見抜いているのだ。いや、羊飼いの娘を、彼女が飼う羊と同様に動物とみなす傾向は、冒頭に紹介した、羊飼いの娘に、宮廷の奥方の代わりを見いだしたマルカプリュの「ある日、垣根の脇で」にも読み取れる。次の引用は、皮肉まじりに騎士を拒む農夫の娘に対する、話者の「私」の言葉である。

“Toza, felh cor e salvage

adomesg’om per uzatje.

(Marcabru, « L’autrier jost’una sebissa », Paden 8, vv. 57-58)

娘よ、賤しく粗野な心を

人は、習慣によって飼い慣らすのだ。

宮廷という文明の側の存在である騎士は、自然の側にいる娘のもとにきて、彼女を手に入れようと入れまいと、彼女から離れて文明の側に戻っていくが、ここには、何の価値転覆もない。すべては、宮廷人である、詩における「私」の主観の中で起こっている出来事なのだから。文中で、演劇作品の『ロバンとマリオン』に触れたが、この作品は、羊飼いの恋人たちの側に焦点をあてることで、彼らを動物のように思っやってきた騎士よりも、恋人たちの方に人間性があるという意味で、パストゥレルのパロディーになっている。それに対して、本論で検討したパストゥレルは、宮廷風叙情詩とまったく同じ価値観から書かれているものであり、そのパロディーと言うことはできない。

パロディーに見えるところにパロディーがあるとは限らないということが本論で述べたいことである。以上に述べたことは、パストゥレルや、宮廷愛の問題について詳しい方には、当たり前のことかもしれない。しかし、パロディーに関するシンポジウムの準備をするに際して、日本ではパストゥレルそのものが知られていないことがわかったので、このような報告をさせていただいた。

註

- (1) Michel Zink, *La Pastourelle. Poésie et folklore au moyen âge*, Paris ; Montréal : Bordas, 1972, p. 66.
- (2) 本論は、2022 年 12 月 3 日に龍谷大学大宮キャンパスで行われた国際アーサー王学会日本支部 2022 年度年次大会でのシンポジウム「宮廷騎士文学の遊戯性の諸相——恋愛奉仕のパロディー化を中心に——」での発表を元に行っている。日本の中世文学の研究者に対して開かれたパロディーに関するシンポジウムで、一見パロディーに見えるものは本当にパロディーと言えるのかということを問題にしている。
- (3) 本論での、パストゥレルの引用は、*The Medieval Pastourelle*, translated and edited by W. D. Paden, 2 vol., Garland Publishing, New York & London, 1987 による。Paden 26 は、この詩が、このアンソロジーで 26 という番号を与えられていることを意味する。以下同様。
- (4) Zink, *op. cit.*, ch. 3 « Chevalier et paysan », pp. 53-63.
- (5) Zink, *op. cit.*, ch. 9 « Serrana » et femme sauvage », pp. 86-103 を参照。
- (6) Zink, *ibidem*.
- (7) 引用は、Andreas Capellanus, *On love*, ed. P. G. Walsh, London, 1982 を底本とした Wikisource より。https://la.wikisource.org/wiki/De_amore/Liber_I/Capitulum_XI (最終アクセス日：2023 年 11 月 28 日)